

花を継ぐもの

—— アチックミュージアムから花祭の未来へ ——

内藤 久義

「花狂い」ということばがある。愛知県北設楽郡一帯に伝わる花祭に、身も心ものめり込んでしまった人のことである。冬が近づくと花祭の囃しである、「テーホヘ テホヘ」の独特のリズムと響きが耳に浮かんで離れなくなるのだ。

花祭は霜月の頃に行われる独特の湯立て神楽で、太陽の力が衰えるこの時期に、生命と大地の再生を祈念して行われ神事である。大きな釜に湯を沸かし、神々を招き舞いを奉納し、神とともに新たに生まれ清まるのである。

渋沢敬三は昭和4（1929）年^{*}に、はじめて北設楽郡上黒川の花祭を訪れ、昭和10年までの間ほぼ毎年この地方を調査している。早川孝太郎が愛知県南設楽郡の出身であり、早川の口からこの地方に残る古い習俗の話聞いたことによって渋沢は花祭を訪れるのである。渋沢は花祭行に、折口信夫、今和次郎、宮本勢助、宮本馨太郎、柳田国男らを招き、彼らとともに本郷村三ツ瀬（現東栄町）出身で県下有数の林業家原田清と親交を重ねた。渋沢、早川たちとの交流は、原田が日記形式で綴った『本山雑記』（2007年・神奈川大学日本常民文化研究所編）に記されている。また、昭和5年には自邸で中在家の花祭を上演し、その模様は16ミリフィルムで撮影され今も見ることが出来る。渋沢も立派な「花狂い」の一人だったのである。

昭和5年に早川孝太郎は『花祭』を完成させるが、前後編1600ページの大作を書くことを勧めたのは渋沢である。当初、柳田国男から花祭を小さな本にまとめるように言われるが、渋沢は早川に徹底調査を提案し、生活・習俗・伝承と民俗芸能の関わりを調査させ、大著『花祭』が生まれた。これも渋沢が花祭にのめり込んだ故の成果なのであろう。

渋沢敬三ほど多くの研究者を育成し、学問の花を咲かせるべく尽力した人物はいないのではないだろうか。単に資金援助だけではなく、研究者としての適格な助言があったからこそ、援助を受けた者それぞれが独自の分野を開拓していったのである。渋沢はアチックミュージアムという肥沃な土壌で若い学者たちを育てた。早川もその一人であり、また、宮本常一もアチック出身である。

「学者になってはいけないよ。学者はたくさんいる。君は事実や資料の発掘者になってくれ。そのかわり生涯貧乏するよ。その覚悟で日本中をあるいてもらいたい」（宮本常一「渋沢敬三先生をしのぶ」『宮本常一著作集50 渋沢敬三』2008年・未来社）。この渋沢のことばは宮本の研究者としての方向を決定付けた。その通り宮本は生涯日本中を旅することになる。

渋沢敬三と宮本常一の出会いは昭和10（1935）年、大阪で行われた大阪民俗談話会であった。当時の宮本は肺結核での長期療養から脱し、郷里から上阪し大阪府泉北郡取石小学校に教員として勤めていた。談話会の席上で渋沢は足半草履の研究について熱心に語る。この出会いをきっかけとして、宮本は昭和14年10月にアチックミュージアムに入所し、渋

沢が亡くなる昭和38年まで、20年以上の長きに渡って二人の交流は続くのである。

宮本は渋沢から一県一冊ずつの民俗誌の執筆を依頼され、予備調査的に日本全国を見て歩くことを提案される。旅は島根県八束半島を振り出しに、中国山脈を山口県の奥まで入り岩国に達する。この記録は『出雲八束郡片句浦民俗聞書』『中国山地民俗採訪録』としてまとめられ、続いて屋久島、種子島、鹿児島から大隅半島を経て宮崎県都城へ至り、最終的に椎葉村を訪ねる。

宮本がはじめて花祭を訪れたのは昭和18年1月である。昭和31年にも同地方を調査し、古老たちの話をまとめた「名倉談義」を発表しているが、昭和18年の花祭への旅が宮本の長い調査旅行の一つの区切りとなった。昭和17年、日銀副総裁に就任した渋沢は、研究に携わる時間がなくなったこととともに、やがて迎える空襲への準備を託すため、花祭調査を最後に宮本を東京へ呼び戻す。宮本は保谷（現西東京市）にあった民族学博物館の整理に、宮本馨太郎、吉田三郎らと没頭し、昭和19年1月、大阪へ引き上げる。しかし、大阪で罹災した宮本は、終戦後上京し再び渋沢家の食客となったのである。その後も調査や旅を続けながら、武蔵野美術大学に職を得、昭和41（1966）年には近畿日本ツーリストから研究費を供出してもらい、日本観光文化研究所を設立した。

日本観光文化研究所には、宮本の講義を受けた武蔵美の学生や卒業生が多く集まって来た。また、宮本が武蔵美で作った生活文化研究会の勉強の場としても機能していたのである。そのようなメンバーの集まりだった研究所に、昭和42年、須藤功が入所する。須藤は後に民俗写真家として確固たる地歩を築く人物である。

自著『花祭りのむら』（2000年・福音館書店）によれば、昭和38年、当時、豊橋に住んでいた須藤は、東栄町・月の花祭を訪れる。しかし、花祭を最後まで見ずに帰途につき、それが気がかりとなって早川の『花祭』を読む。やがて須藤も花祭の囃しが耳から離れなくなる「花狂い」となってゆくのである。

少年時代からの夢であったパイロットを目指して須藤は航空自衛隊に入隊する。パイロットにはなれなかったが、そこで写真技術を学び航空自衛隊のさまざまな撮影を行う。しかし、これが世の中の役に立つのだろうかという疑問が募り、ある日、須藤を花祭に向かわせたのである。花祭に通ううち、奥三河の人々がなぜこの祭を必要としたのかという問題に突きあたり、この探求こそが写真家として生きる道なのだと考えるに至った。そして航空自衛隊を退官し、宮本常一の門をたたくのである。

それからおよそ20年間、宮本のもとで須藤は祭や民俗芸能、また、そこに生きる人々の生活を写真に収めるべく旅を続ける。旅の日数は20年間でおよそ2700日、年に200日近く旅した年もあるという。まさに宮本と同一の視点をもって仕事に埋没したのである。

宮本は須藤に撮ること書くことを徹底的に指導した。写真については「一枚の写真から、いろいろな生活をよむことができる写真」を求められ、文章は学問的にならない、研究者を意識しない文を書くことを要求される。これは宮本がアチックに入所するとき渋沢に言われた、「学者にならないように」ということばを、そのまま伝えているのである。宮本はさらに「民俗芸能を撮るにしても、背景の生活をしっかり押さえておかなければだめだ」「生活の写真記録は、ひとつの地域をたんねんに撮ることが大切」と語る。その教えを受

けて須藤は、奥三河を自分のフィールドとして花祭に深く関わってゆく。

昭和56（1981）年、宮本常一は73歳で亡くなる。研究所はその後8年間存続するが、須藤は昭和60年に退いている。その後の須藤の活躍は、『写真でみる 日本生活図引』全9巻（1988～1993年・弘文堂）をはじめ、日本の民俗や生活、芸能を知る上で重要な著書を多数出版している。

花祭との関わりは続き、須藤を実行委員として東京でも花祭の公演が行われたことがある。「民俗芸能と農村生活を考える会」（社団法人全国農協観光協会）が主催したもので、民俗芸能を糸口に、農村の生活と文化を知ってもらい、都市と農村の交流をするきっかけを作るという主旨である。須藤は「考える会」で行う公演に、北設楽郡東栄町御園の花祭を推薦したのだった。

東京在住の広木さんの両親は音楽家で、小さい頃から家族で全国の祭や芸能を見て周っていた。昭和57年、当時2歳だった広木さんは御園の花祭を体験する。家に帰ってから譜面台を持って頭の上に振りかざし、それはまるで花祭の鬼が鉞を振りまわす所作のようであったそうである。わずか2歳にして花祭のとりこになり毎年のように御園に出かけ、小学校1年生のときには飛び入り参加で花祭の初舞台を踏む。やがて広木さんは、平成元（1989）年、東栄町の御園小学校（現在は廃校）に転入し、御園の花祭のせいと衆として舞うのである。

この話は須藤功の『花祭りのむら』に詳しいが、須藤が御園の花祭を東京で公演するにあたって相談したのが、御園の助禰宜である尾林克時さんであった。東京の少年がやって来て花祭で舞ったという話も尾林さんから聞いた。広木さんたち一家は祭のたびに尾林家で休息させてもらい、広木さんは尾林さんをととても慕っていたのである。

花祭では「花の舞」という子供だけで舞う演目がある。しかし、近年過疎化で子供の数が少なくなり、この舞を行えない地区も出てきた。尾林さんから広木さんの話を聞いた時、須藤が考える芸能が伝承する理由のひとつ、「次世代の幸福を思いやる願い」がここにあるのではないかと考える。子供がいなくなるということは、次世代を思いやる事が出来なくなることである。しかし、東京の子である広木さんを御園が受け入れ、花祭を伝えていくことに新たな伝承をみるのではないか。

生徒数700人の東京の小学校から、11人しか学童のいない御園の小学校に転校してきた広木さんは、尾林家に寄宿しながら小学校が廃校になるまでの一年間、さまざまな山村生活を体験し、また尾林さんの厳しい舞いの指導を受けて過ごした。そして、御園の子として認められ、せいと衆として花祭で舞ったのである。

一年後、広木さんが東京へ戻ってからも、御園との交流は続いた。平成5年に第1回「東京花祭り」が東京都東久留米市で行われたのである。広木さんの両親や広木さんが中心となり、御園からは尾林さんや花祭の最高祭祀者である花禰宜も指導に来た。現在、「東京花祭り」は17回を数え、御園からはバスで大勢の人が手伝いに来る。また、「東京花祭り」のメンバーも御園に応援に駆けつけるのである。もちろん広木さんは御園でも舞い手の一人として活躍する。

昭和4年に渋沢敬三が花祭を訪れてから14年後の昭和18年に宮本常一が同地を訪ね、さらに20年後の昭和38年に須藤功は東栄町・月の花祭を見る。そして、19年後、昭和57年に2歳の広木さんは御園の花祭に夢中になり、平成5年、「東京花祭り」がはじまる。昭和4年から65年の歳月を経て、花祭は東京へも伝播したのである。

アチックミュージアムからは多くの学者が巣立ち、早川や宮本、須藤という大樹を育てた。しかし、アチックの業績は学問だけではなく、ひとつの民俗芸能を広めたという点でも評価されてよいだろう。渋沢から宮本へ、宮本から須藤へ、そして「東京花祭り」へと花は継がれてゆくのである。

(敬称略)

※渋沢敬三が花祭にはじめて訪れたのは昭和3（1928）年が通説であったが、最近の研究では昭和4年有力となり本稿でも昭和4年とした

■参考文献

- 宮本常一『宮本常一著作集39 大隅半島民俗採訪録・出雲八東郡片岡浦民俗聞書』1995年 未来社
宮本常一『宮本常一著作集23 中国山地民俗採訪録』2002年 未来社
宮本常一『宮本常一著作集50 渋沢敬三』2008年 未来社
宮本常一『民俗学の旅』1978年 文藝春秋
須藤功『花祭りのむら』2000年 福音館書店
「ひととき」2006年11月号 ジェイアール東海エージェンシー
原田清『本山雑記』2007年 神奈川大学日本常民文化研究所編・日本評論社